Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2026-11-26

「心理学化する社会」における支配的な自己物語 / 排除される自己物語の構成過程について

津田, 翔太郎

(Citation)
社会学雑誌,38:205-221

(Issue Date)
2021-07-31

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(JaLCDOI)
https://doi.org/10.24546/E0042501

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0042501

《投稿論文》

「心理学化する社会」における支配的な自己物語／排除される自己物語の構成過程について

津田　翔太郎
神戸大学大学院人文学研究科研究科研究員

国内外において展開されている「心理学化」に関する議論は、現代社会を捉えるうえで有用な視座の一つとされている。片桐雅隆はこの心理学化に係る議論について、①管理的な心理化、②自己実現の心理化、③人間関係の感情意識化の三種に大別し、「自己の構成」という観点から精密な議論を展開している。

この議論はしかし、①管理的な心理化がなぜ自己実現の心理化の文脈において行為者に積極的に受容されるのか。②また、何らかの理由によってそれが行為者に受容されたとして、どのような自己のあり方が排除されうるのか、という問いを明らかにできていない。これらの問いを明らかにすることは、今日的な社会において排除される自己物語の構成過程を把捉するに当たって重要と考えられる。

以上の論点に基づき、本論においては、①心理学的な言説が、管理的な心理化の文脈で必要とされるとともに、自己実現の心理化の文脈で行為者に積極的に受容されることで、管理的な心理化と自己実現の心理化に基づく相補的な構造および支配的な自己物語が存立すること、そして②そこから排除される自己物語の内実について明らかにすることを目的として、議論を展開する。

一　はじめに

国内外において展開されている「心理学化」に関する議論は、現代社会を捉えるうえで有用な視座の一つとされている（樫村　二〇〇三、桐　二〇一七、森　二〇〇〇、斎藤　二〇〇九、山田　二〇〇二）。中でも、様々な角度から展開されてきたこれらの議論を、「近代以降」という大きな時代区分に鑑みて、「自己」の観点から取りまとめた片桐雅隆の研究は、注目すべき議論として位置づけられる。

片桐はこの心理学化に係る議論について、①管理的な心

理化（様々な問題を社会の問題としてではなく心や精神の語彙に帰属させる傾向）、②自己実現の心理化（本当の自己やアイデンティティは心の中にあり、それを探究していこうとする傾向）、③人間関係の感情意識化（人間関係の基準を、外的な制度ではなく自身や相手の心（感情）に求め、その心を尊重して関係性を構築していこうとする傾向）の三種に大別し、これらの議論が示す傾向は、広義には近代社会の成立以降、狭義には六〇年代～七〇年代の自己解放運動に端を発し、九〇年代以降のグローバル化が進展した時代に顕在化したと論じている（片桐　二〇一七：五七―一六三）。

この種の議論はしかし、以下に示す理論的な問いを明らかにできていない。すなわち、①管理的な心理化は、共通価値が生じにくい今日的な社会において人々を管理する言説として求心力を持ちうるとしても、なぜ自己実現の心理化の文脈において、行為者に積極的に受容されるのか。②また、何らかの理由によってそれが行為者に受容されたとして、どのような自己のあり方が排除されうるのか。これらの問いを明らかにすることは、今日的な社会において排除される自己物語の構成過程を把捉するに当たって、重要と考えられる。

そこで本論においては、①心理学的な言説が、管理的な心理化の文脈で必要とされるとともに、自己実現の心理化の文脈で行為者に積極的に受容されることで、管理的な心理化と自己実現の心理化に基づく相補的な構造および支配的な自己物語が存立すること[1]、そして②そこから排除される自己物語の内実について、「新しい個人主義」、「ハイパー・メリトクラシー」、「再帰性」、「ハビトゥス」、「自己物語論」といった視座を援用し、明らかにすることを目的とする。これによって、心理学化に関する議論を、今日的な社会を分析する上で有用な視座として位置づけなおしたい。

二　管理的な心理化の概況

冒頭で述べたとおり、社会の心理学化[2]に関する主要な議論は、①管理的な心理化、②自己実現の心理化、③人間関係の感情意識化に大別され、特に①管理的な心理化は、「心的な学問領域や専門知によって行為者を統治可能なものにしていく」という文脈において、現代社会を捉える有用な視座として盛んに議論が展開されており（例えばRose 1999=2016など）、樫村愛子が明晰にその要点を取りまとめている。

樫村は、管理的な心理化の内容を主眼に置き、社会の心理学化について、「社会の脱制度化や再帰化が進み、人々を支配していた伝統や価値の規範に代わって、心理学的な

言説や技術が人々を支配していく社会」（樫村　二〇〇三：i）と捉える。樫村はその事例として、「大学教育の教職単位におけるカウンセリング知識の導入や教育カウンセラー制度の導入、企業社会における自己発見・自己反省の視点からのカウンセリング技術の導入、脱施設化・脱医療化の文脈において自立や自己決定性を高めることを目的としたカウンセリング技術の導入、心理療法の家族空間への介入、犯罪行為や逸脱行為に対する心的疾患という視座の導入、心理学がテーマとなる映画やアニメの人気の興隆、宗教系セラピーの興隆」などを挙げ、様々な社会領域における人間関係の整備や調整を、近代的規範・社会技術に代わって、心理療法的な知が担うようになってきたことを、社会の心理学化の特徴として捉えている（樫村　二〇〇三：二二九―三一）。

この視座を参照すると、近代的な共通価値によって人々を管理することが困難となったポスト近代社会の管理技術として、心理学的な知が必要とされるようになったと捉えられる。次節においては、このような知が必要とされるようになったポスト近代社会の内実について、新しい個人主義、ハイパー・メリトクラシーといった概念を援用して詳しく見ていく。

三　ポスト近代社会の内実：新しい個人主義・ハイパー・メリトクラシーの進展

第二節で提示された論題を検討するに際して有用な視座と考えられるのが、A. エリオットによる新しい個人主義である。エリオットは今日的な社会について、「人間関係や所属集団の短命化、消費をとおしたなりたい自分への即座の変身、雇用や技術に係る流動化の進展による柔軟な労働の実現、情報通信技術の発達による情報や他者への瞬時のアクセス」などの可能性の拡大を背景として、自己やアイデンティティの絶え間ない再創造が社会的に要請されるようになったこと＝「新しい個人主義の台頭」を指摘している（Elliott 2010=2010：54-61; Elliott 他　二〇一〇：七二―六、津田　二〇一九a）。

このような、「流動性が高まった他者や社会に応じて自己・アイデンティティを再創造して適合すべし」という規範と連動して、とりわけ消費者の流動的・多元的な需要に応え続けなければならないゆえに量的・質的な柔軟性が求められる労働領域においては、ハイパー・メリトクラシーが重要視されていると考えられる（本田　二〇〇五：一六―七）。

本田によると、今日の労働領域においては、「標準化された知識の習得度や知的操作速度など基礎学力としての能

力／同質性の高い文化や規範を共有する集団に協調できる能力」である近代型の能力＝メリトクラシーに加えて、「創造性・主体性、柔軟なコミュニケーション能力・思考力など、多様でありかつ情動的な部分を含む能力」である「ポスト近代型の能力」＝ハイパー・メリトクラシーが求められるようになってきている（本田　二〇〇五：二二，五二―三）。本田はこの傾向の一つの傍証として、「企業年鑑に掲載された各企業の採用担当者のコメント欄の内容を一九七一年、一九八六年、二〇〇一年の三時点について分析し」（本田　二〇〇五：五〇）た岩脇千裕の、企業が求める学生像に関する研究（岩脇　二〇〇四）を参照し、「思考力」、「柔軟性」、「問題意識」、「革新」、「目標実行力」などの、いわゆるハイパー・メリトクラシー言説が増加していることを取り上げている（本田　二〇〇五：五〇―二）。

このようにポスト近代社会においては、新しい個人主義、なかんずく労働領域においてはそれと親和性が高いハイパー・メリトクラシー型の能力が規範として位置づけられており[3]、前節の議論を踏まえると、そのような流動性・多元性に係る規範への適合を促すために、管理的な心理化が必要とされるようになったと考えられる。次節においては、このような規範への適合のために行為者が、心理学的な言説を重要な知として位置づけていく心的過程について、森真一の議論を参照し論じていく。

四　管理的な心理化を行為者が受容する土台の形成

森によると、市場・技術・人員などの流動性が高まり、一元的な監視や教育が困難となったポスト近代型（＝ハイパー・メリトクラシー型）の企業組織において従業員は、「感情を冷静に把握・制御し、目標に向かって自分を動機づけ、（その場その場で出会う）他者への共感をとおして多様な対人関係を円滑に処理できる能力」を、心理学的な知見を用いて自己マネジメントする技術（例えば、「～心理学の考え方」を用いてアンガーマネジメントをして嫌いな上司と付き合うなど）が要請されることとなる[4・5]。さらにこの要請は、「個性の尊重」や「自己実現」といった価値観と連動した、「従業員にとって望ましい自己像」として企業側から発信されるゆえに、行為者は自ら進んでそのような言説を取り入れざるをえず、（時に理不尽な）能力主義や不安定な雇用形態は正当化されることとなる（森二〇〇〇：一六八―九〇）。

このハイパー・メリトクラシー型の能力・自己像は今日、「人間力」という言葉で、「管理」という権力的な文脈を離れ、「自ら進んで獲得すべき能力・それに基づいた自己像」という言説として広範に流布していることが、牧野智和によって指摘されている。牧野は、雑誌の言説分析をとおし

て、九〇年代後半以降、主に労働や教育領域において、人間力という言説が目指すべき人物像のキーワードになっていると指摘している。そして牧野によると人間力という言説は、(一)「危機管理能力」、「情報収集・活用能力」、「人間的魅力」、「情熱」、「EQ(心の知能指数)」、「無私の心」、「包括的直観力」、「人とのつながり」など、雑誌や特集の方向性に合わせてその内実が文脈依存的に用いられ、(二)「不足した力」、「獲得すべき力」として包括的・総花的なままに用いられ、(三)人間力を育成しようとする種々の実践がその根拠を明示されないままに称揚されているという特徴がある(牧野 二〇一四：四七―五〇)。

この人間力という言説は、抽象的な理念であるものの、多くは「人格」に焦点が当たったものであり、「各々の人格的な魅力によって(流動的・多元的な)他者との関係の構築が目指される」という文脈で捉えられることから、ハイパー・メリトクラシー言説や新しい個人主義において要求される自己像と類似する概念と言え、企業の理念に留まらず、目指すべき人物像として我々の生活に深く浸透していると考えられる[6]。このようなハイパー・メリトクラシー型の人格は、「流動的・多元的な他者に応じて柔軟に自己のモードを切り替えることが称揚され、かつ自己意識としてそれに違和を感じないこと」が前提とされていると考えられることから、浅野智彦(二〇一五)などが論じる「多元的自己・アイデンティティ」と類似する自己意識と捉えても差し支えはないと考えられる。本論ではこのような、多様なハイパー・メリトクラシー型の能力の中でも自己意識に焦点を当てた性向を、便宜的に、「ハイパー・メリトクラシー型の自己(流動的・多元的な他者との関係に基づき、その都度モードを切り替える自己)」と呼称する。

これまでの議論をまとめると、新しい個人主義やハイパー・メリトクラシーが進展したポスト近代社会、中でも労働領域を構成する行為者においては、ハイパー・メリトクラシー型の自己が理想として広く共有されるとともに、心理学的言説が、それを獲得・管理するための技術として位置づけられ、重要視されていることが確認された。換言すると、行為者において、ハイパー・メリトクラシー型の自己が理想の人格として位置づけられたことで、管理的な心理化が生成する心理学的言説を受容する土台が整った、と捉えることができる。それではなぜ行為者は、一つの処世術であるものの、個々人の自由意志を疎外しかねず、受け入れる必然性がない管理技術である心理学的言説を(半ば積極的に)受容するのだろうか。

五　自己実現の心理化の内実

前節で提起された問いを考察するに当たって、樫村が重

要な指摘をしている。樫村は、社会の心理学化を、社会構造の変容を背景とした生活世界の解体という観点から捉えるに当たって、ポストモダン社会への移行・グローバリゼーション・情報化・テクノロジー化などによって中間集団が衰退し、個人と社会が直結するようになってきたという「個人化」(Beck 1986=1998)の視座の(時代診断として一定の)有用性を指摘している(7)(樫村　二〇〇三：一三二)。

この議論では、「主体を支える生活世界や「社会的なもの」が解体し」(樫村・片桐　二〇一一：三七四)た第二の近代＝再帰的近代(とりわけわが国においては、企業や家族の解体が進んだ九〇年代後半以降)において(樫村・片桐二〇〇三：三七八)、個人はアイデンティティ不安を埋めるために心理学的言説を志向するといった心性が示唆されている。

以下においてはこのような、「生活世界の解体によるアイデンティティ不安を心理学的言説で埋める」という観点に着目し、片桐、牧野、樫村らの議論を参照・発展的に検討することで、行為者が心理学的言説を受容する(自己実現の心理化の)心的過程を明らかにする(8)。

先述のとおり、片桐は心理学化を、①管理的な心理化、②自己実現の心理化、③人間関係の感情意識化に三区分し、主に②を主題として位置づけ、「自己やその状況を解釈し対処するための枠組みが心や精神という内的なものに移行してきたこと」(片桐　二〇一七：一四〇)として捉え、戦後のわが国において、自己やアイデンティティを規定する言説が大文字の他者から自己自身へと縮小していく中、とりわけ九〇年代以降、近代的な大きな物語の希薄化や他者関係の不安定化を背景として、アダルト・チルドレンなどの心理学的言説、および脳科学的言説、遺伝子やゲノム等生物学的言説などの自己内在的・生得的な指針によって自己を規定する心性(ポスト心理学化)(9)が広範に流布していったことを指摘している(片桐　二〇一七：一四九―五九，一三三―五、津田　二〇一九a)。この文脈における自己内在的・生得的な指針は、不安定化した他者などの外部に依拠しないゆえに、自己の不確定性を打ち止める要素として捉えられる。以上の議論を参照すると、他者の縮小を背景としたアイデンティティ不安＝自己の不確定性(再帰性)の打ち止めが、自己実現の心理化に係る推進力の一つと考えることができる。

牧野も、類似の議論を実証的な位相において展開している。牧野は、九〇年代後半以降において興隆した自己啓発書の分析をとおして、「自己は、心理学や脳科学、あるいはスピリチュアルなどの自己内在的な言説によって規定される。そしてそれは、自己に自ら働きかけ変革を促すことによって、より望ましいものに成長させることができる」という内容が広く共有されていると論じている(牧野

二〇一二：八〇―二、津田　二〇一九ｂ）（例：「心理学的、脳科学的に見て自身の自己はＡという傾向がある（あるいはＡＡと類型される）。Ｂという（内的な）アプローチを行えば、それはさらに良いものになる」といった心性）。ここで着目すべき論点は、「心理学・脳科学・スピリチュアルといった特定の文脈による自己理解をとおして自己への再帰的問い直しは打ち止められる」という心的作用が想定されている（牧野　二〇一二：一八二、二四三）一方で、自己実現の欲望は、「特定の文脈において絶え間ない変化にさらされている」ということである。このような「再帰性の打ち止め」と「特定の文脈における絶え間ない自己実現」といった一聴して相反する心性は、いかなる理路によって両立するのだろうか。

樫村は、「再帰的な行為主体」を可能とする「存在論的安心」（Giddens 1991=2005）の想定は、理論的にも、またポスト近代社会という時代的にも困難であると論じている（樫村　二〇〇七：六六―七）。このうち、後者を本論の主旨に照らし合わせて解釈すると、社会の自明性が解体したポスト近代社会においては、絶えず価値やものごとの真偽が更新されていくゆえに、再帰的選択の足場となる存在論的安心の獲得は極めて困難であるため、存在論的安心のかなめである自己を構成する言説も多くの場合、暫定的なものとしかならないと捉えられる。行為者は、このような自己の不確定性を縮減するために、特定の「場」[19]、例えば労働領域の場において、心理学的言説のような、（科学的とされるがゆえに）制度的な再帰性が比較的更新されにくいと思われる知を自己構成の材料とする。これが再帰性の打ち止めの内実と考えられる。他方、前述のとおり特定の場、特に労働領域の場においては、流動的・多元的な他者や環境に適合するように、再帰的な自己コントロールや自己実現が促されることとなる。しかしそれは、場や場を信頼する行為者の自明性を解体しうる他者性やメタ物語への問いを遮断した「限定付きの再帰性」であるゆえに（樫村　二〇〇七：七五―六）、存在論的不安は顕在化しづらくなると考えられるため、再帰性の打ち止めを前提とした状態での絶え間ない自己実現の希求が可能になると考えられる。

以上の視点から、心理学的言説に依拠した自己構成は、限定付きの再帰性であるゆえに、自己の不確定性の縮減と場に適合した絶え間ない自己実現の希求の両立を、一定の水準で成立させることができると言える。

これまでの議論をまとめると、①現代的な社会・組織において、目指すべき理念としてハイパー・メリトクラシー型の自己が位置づけられるとともに、それを管理・促進する技術として心理学的言説が採用される（管理的な心理化）、②行為者は、他者の縮小を背景として自己の不確定

性（存在論的不安）を埋め、かつ（①の理念を受容し）場に適合して不断の自己実現を図るという動機によって心理学的言説を志向する（自己実現の心理化）、③②ゆえに心理学的言説は、社会・組織による管理技術として作用するのみならず、自己の不確定性の縮減と自己実現の希求のために、行為者に積極的に受容されることが示唆された。次節においては、これら管理的な心理化と自己実現の心理化が、相補的な構造化作用（社会・組織、そしてそれを構成する個々人の心性の機能的な連関が強化される作用）によって、支配的な自己物語として大きな希求力を持ちうることを論じる。

六　相補的な構造化作用、支配的な自己物語の存立

本節においては、管理的な心理化と自己実現の心理化の相補的な構造化作用について、P. ブルデューのハビトゥス概念を参照し明らかにするとともに、その作用によって生成された構造が支配的な自己物語として存立する過程について、自己物語論を参照し、具体的に論じていきたい。

ブルデューによるハビトゥス概念は、「知覚・動機・行為（＝実践（慣習的行動））を産出する、必ずしも自覚されない性向の体系」を指し示し（Bourdieu 1979=1990、堀田　二〇一二：三〇七、石井　一九九〇：vi）、「どんな明確な規則よりも、顕在的などんな規範（ノルマ）よりも」「実践の恒久性を保とうとする傾向をもっている」（Bourdieu 1980=1988: 86）。そしてこのハビトゥスは、特定の場と行為者の実践を媒介する性向であり、行為者はハビトゥスによって場に構造化されるとともに、場を構造化する主体として位置づけられることとなる（Bourdieu 1980=1988: 83-4）。これらの視点から、行為者の実践はハビトゥスを介した場の論理によって安定的な構造の要素として存立するとともに、場もまたハビトゥスを介した行為者の実践によって安定的な構造の要素として存立することとなり、これらの作用をとおして、ハビトゥスを介した場と行為者の相補的な構造が成立することとなる。[11]

このようなハビトゥスは、主として行為者が定位する家族において一定の時間をかけて獲得され、あらゆる経験の知覚と評価の原理になる（Bourdieu 1980=1988: 856）。後にも論じるように、ハイパー・メリトクラシー型の能力や自己は、個々人の人格・感情・身体などと一体化した性向であり、生来的な資質や日常的・持続的な環境要因に規定される部分が大きいとされているため（本田　二〇一五：二三―四）、このハビトゥスとして位置づけることができる。

以上の視座、および前節までの議論を踏まえたうえで、管理的な心理化と自己実現の心理化の相補的な構造化作用

について、具体的に論じていきたい。①行為者は、ハイパー・メリトクラシー型の能力、とりわけ自己に係る性向＝ハビトゥスを一定程度備え、労働の場に参入する。そして、自己の不確定性の縮減および場に適合した自己実現という動機に基づき、「理念としてのハイパー・メリトクラシー型の自己」を獲得するために、心理学的言説を用いて実践を行う（自己実現の心理化）。この実践の蓄積が、今日的な労働の場を構造化する。

②一方で労働の場は、ポスト近代社会への適合を行為者に促すために、ハイパー・メリトクラシー型の自己＝ハビトゥスを介して、①の心理学的言説を用いた行為者の実践を構造化する（管理的な心理化）。このような、①行為者と②場の相補的な構造化作用によって、行為者と場の双方を含んだ安定的な構造が存立すると考えられる。

このような作用によって生成された相補的な構造は、行為者が自己を構成するに当たって、共感しやすい物語＝支配的な自己物語として存立すると考えられる。以下においては、自己やアイデンティティを物語として捉える自己物語論の視座（＝自己やアイデンティティが、一定の時間軸に開かれた様々な経験や記憶の中で生起する自己イメージの連関によって構成されるという視座）、とりわけ「支配的な自己物語」に係る議論を展開する浅野（二〇〇一）を参照・発展的に検討することで、この存立過程を明らかにする。

浅野を参照すると、自己物語の（他者に受容されうる）同一性は、「①他者を志向し、②他者を納得させるような形で経験や記憶を選択・配列・構造化する」という作用によって構成される。この過程においては、任意に自己物語の同一性が担保されるわけではなく、定位する社会において、同一性を構成しやすい自己物語／しにくい自己物語が存在する。すなわち、他者や社会・文化的規範において受容されやすい物語、あるいは広範に流布する定型的な物語に該当するエピソードは自己物語として構成されやすく、そうでないエピソードは自他に了解されにくいため周縁化・排除され、経験や記憶の奥底に沈殿し、自己を構成する残余＝「自己の語りえなさ」として位置づけられることとなる（浅野　二〇〇一：二四，六〇―三，九七，一〇八，津田　二〇一九b）。この視座に基づくと、ハイパー・メリトクラシー型の自己を介した、自己実現の心理化と管理的な心理化の相補的な構造は、行為者にとっては実存を支える役割を果たし、場にとってはポスト近代社会への行為者の適合を可能にすることから、（慣習的な位相・理念的な位相の双方において）他者や社会・文化的規範において受容されやすく、また、定型的な物語としても位置づけられやすいと考えられるため、支配的な自己物語として再生産されやすいと考えられる。[12]

しかしこのような、ハイパー・メリトクラシー型の自己を介した、自己実現の心理化と管理的な心理化の相補的な構造に基づく自己物語は一方で、特定の自己物語を排除する作用も帯同していると考えられる。樫村の議論を再び参照すると、近代の分化によって成立した場を構成する再帰性は、今ここを成立・発展させる価値を対象とした、場や場を信頼する行為者の自明性を解体しない限りでの限定付きの再帰性であり、形式的合理性＝マクドナルド化（効率性、予測性、計算可能性、制御の論理）（Ritzer 1993=2008）を志向する論理によって支配されている。それゆえに、その論理の外部にある他者への想像力やメタ物語への欲望（＝自明性や実存への問い）が消失した、「動物的な主体（場の内部のみで欲求を充足する主体）」の生成を促すこととなる（東　二〇〇一、樫村　二〇〇七：七九―九二、一〇六―八）。そのような場の論理はすなわち、「場に適合的でない他者を排除する可能性を孕んでいること」を指し示すと考えられるが、それでは、どのような自己物語が排除されうるのだろうか。次節においては、自閉症やコミュ障といった人格類型を一例としつつ、それらの特徴を抽象化し、排除される自己物語の特徴を理論的に考察していく。

七　排除される自己物語

本田が論じるように、従来型のメリトクラシーは、知識の暗記、公式や規則の適応、計算の習熟など一定のノウハウが存在し、後天的な学習活動によって習得しやすい能力として捉えられる。しかし、ハイパー・メリトクラシーで重視される個性や創造性、柔軟な自己意識に基づいたネットワーク形成力などは、いかに培っていくかについて社会的な合意が存在せず、かつ個々人の人格・感情・身体などと一体化したハビトゥスとして捉えられるゆえに、生来的な資質や日常的・持続的な環境要因に規定される部分が大きく、後天的な学習では習得しにくい性向と言える（本田二〇一五：二三―四）。それゆえに、ハイパー・メリトクラシー型の自己が理念化された場においては、恒常的な排除が生じる可能性があると考えられる。

今日においてはとりわけ、これまで述べてきたように、コミュニケーションの流動化・多元化の進展を背景として、ハイパー・メリトクラシー型の自己を要請する規範が高まりつつある。このような、多様な人々とコミュニケートする能力や協力していく能力が（ある意味で過剰に）求められる状況においては、とりわけ「自閉症」の人々の困難が〈象徴的に〉前景化することが指摘されている（樫村二〇一九：六五）。

竹中均の議論を参照すると、自閉症[13]とは、主として脳の機能障害に由来すると考えられており、知的障害が無い人もいれば重い人もいる精神疾患である。それにおいては、いわゆる健常者の人々と比較して社会性（他者との関係を構築していく性向）が欠如する傾向にあり、とりわけ相互行為ごとに要請される役割を演じたり、（冗談と本気を区別するなどの）コミュニケーションパターンに順応したりするのが苦手という特徴が指摘されており、それらに一定の画一性をもたらしていた近代社会的な規範が形骸化した今日のポスト近代社会においては、その困難性が顕在化しやすくなっていると言われている（竹中　二〇一六：二―一一，一二二）。

また、樫村によると自閉症の人々は、反復労働＝単純労働が要請される工業社会においては比較的適応しやすかったものの、サービス産業を中心とした柔軟な対人関係の構築やフレキシブルな労働環境においては適応が難しくなり、この背景因であるサービス産業化の進展および社会構造の流動化が自閉症を、「インペアメント（機能障害）」から「ディサビリティ（社会的な能力障害）」に追いやっている可能性がある（樫村　二〇一九：三二）。

このような社会的排除は、自閉症の人々のみならず、二〇一〇年頃から爆発的に使われるようになった「コミュ障」という言説に象徴される、いわゆる健常者の人々にもおよんでいると樫村は論じる（樫村　二〇一九：三二）。コミュ障（コミュニケーション障害の略語）とは、「コミュニケーションが苦手な人々」の総称であり、二〇一〇年前後のインターネットを中心に普及・定着し、主として当人に自称的・自嘲的に使用されている言説と言われている（樫村　二〇一九：六七―八）。

それでは、コミュ障と言われる人々は、どのような心的困難を抱えているのだろうか。樫村は、コミュ障と言われる人々の心性の特徴について、「（趣味）同質性の高い限定的空間ではコミュニケーションができるものの、異質性のある空間ではコミュニケーション弱者である」という「限定的コミュ障仮説」と、「オタク文化と一般文化は異なり、一般の文化がオタクのアイデンティティと文化を排除しているがゆえにコミュニケーションが困難である」という「異文化コミュニケーションおよび差別仮説」の二つを唱え、両方の要素を含んだ構造として存立すると指摘する（樫村　二〇一九：六八―九）。後者の指摘に関して、コミュ障という言説とオタク文化を結びつけるのは論理に飛躍があると思われるが、コミュ障の特徴と親和性があると言われている自閉症的な性向の人々は、（言語行為ではなく）視覚が優位であるオタク文化と親近性が高いという指摘もあるため（竹中　二〇一六：三五―六）、本論においては、暫定的にこの視点を採用することとする。

これらの視座を踏まえると、同質性の高い限定的な空間（なかんずくオタク文化）に定位するコミュ障と言われる人々においては、流動的・多元的なコミュニケーションを要請する社会・他者に起因する被排除感覚が、一定の求心力を伴って共有されていることが伺える。

加えてこのような心的困難は、自閉症の人々やコミュ障というわが国独特の（インターネット文化より現出した）人格類型のみならず、「ポスト近代社会において広範に見られる自己意識の困難」として捉えられる。エリオットによると、今日的な社会における行為者は、自己創造の機会が拡張されると同時に、自己規定言説が「短期的で状況依存的なできごと＝エピソードの集塊」と化すことで、社会から廃棄される不安・恐れなどの感情的コストが増大していくという特徴を持つ（Elliott 他 二〇一〇：七六―七、片桐　二〇一七：二〇八―一三、津田　二〇一九a）。すなわち我々は、他者・社会的な場や物理的な空間の流動性・多元性の高まりによって長期的な物語を構成することが困難となり、その時々の出来事によって断片的に物語を構成せざるを得なくなり、それが感情的な負荷を生じさせていると考えられるのである。

これらの議論に基づき、今日において、社会的に排除され困難にさらされうる自己物語の特徴を抽象化するならば、「（何に依拠するかは一概に同定できないものの）諸々の経験や記憶の中で生起する自己イメージの一貫性が高く、それゆえに流動的・多元的な他者や場への適合が困難な自己物語」、と言って差し支えはないだろう。この視座を参照すると、ハイパー・メリトクラシー型の自己を理念とし、心理学的言説に依拠して構成される支配的な自己物語は、自閉症やコミュ障と言われる人々のみならず、ハイパー・メリトクラシー型の自己に該当しない性向、なかんずく、柔軟な自己意識を内面化できなかった人々の性向[14][15]＝一貫的な自己物語を構造的に排除しうると考えられる。

ただしここで留意しなければならないのは、「心理学的言説それ自体が、一貫的な自己物語を排除しているわけではない」ということである（心理学的言説に基づいた、人格的特性を含意する治療概念は、当然ながら自閉症やそれに類するものに限らない）。そうではなく、心理学的言説は、新しい個人主義やハイパー・メリトクラシー[16]など、流動的・多元的な他者や環境への適合を促すための管理技術として採用され（管理的な心理化）、かつ、行為者の不安定性の縮減・自己実現のために採用されること（自己実現の心理化）によってはじめて、一貫的な自己物語を排除する言説として機能すると言える。

八　おわりに

以上の議論をとおして、①（一）流動的・多元的な他者や状況への適合を促すための管理技術として場に採用された心理学的言説が（管理的な心理化）、（二）ハイパー・メリトクラシー型の自己をハビトゥスとして、自己の不確定性の縮減および場に適合した自己実現を図る行為者に積極的に受容されるゆえに（自己実現の心理化）、（一）と（二）は相補的な構造・支配的な自己物語として存立すること、②それによって、一貫的な自己物語が排除されうることが明らかになった。このような力学によって生じる可能性がある排除は、いかにして解消しうるのだろうか。

哲学者の千葉雅也は、G. ドゥルーズの議論を下敷きにして、グローバルなネットワーク社会において情報が過多になり、ひたすら動くこと・変化することが称揚される中、自己の有限性に基づき、他者や他所に関心を向けつつも、「関係づけ過ぎない・世界の全てにつながろうとしない態度」の重要性を説く。この態度は、「モダンでハードな主体性からも」「ポストモダンでソフトな管理からも逃れる」（千葉　二〇一三：三八）中間的な態度であり、接続過剰を回避することを指し示している（千葉　二〇一三：三二―八，五〇）。また、哲学者のR. ブライドッティは、「ポストヒューマン的主体は、ノマド的（遊牧民的）であり、非人間も含めた様々な外部との関係の中から多様に構築される」としつつも、「身体を持ち、確固たる場所に埋め込まれている」と論じている（Braidotti 2013=2019: 95, 286-7）。

これらのような、「一定の多元性に開かれながらも一貫性を伴った（と解釈できる）自己物語」を社会的に承認するとともに、そのような性向を生かせる場を構築していくことが、本稿で論じた排除を解消しうる有効な手段と考えられる。ただ、前述のとおり、行為者と場はハビトゥスを介して相補的な構造として存立するゆえに、容易に変化を促すことは難しい。そうであるなら、そのような構造やそれを存立させるハイパー・メリトクラシー型の自己に係る規範を残存させつつも、それらに還元されない実践を「許容する場」を設けることで、上述のような自己物語の実現可能性を拡張することができると考えられる。これに関する具体的な施策としては、本田が提案する、「専門性の獲得（本田　二〇〇五：二六一）（≒専門性に基づいて一貫的な自己物語を構成することで、流動性・多元性を限定化して対処すること）が有効となる場の拡張」が一例として想定されるが、詳細の検討は今後の課題としたい。

註

（1）片桐による心理学化の三区分のうち、③人間関係の感情意識化は、「規範や規制の希薄化を背景として、行為者が自他の心に細心の注意を払うようになる傾向」に着目する視座である（片桐　二〇一七：一六七―九一）。その焦点は、主として「他者との相互行為」に向けられており、本論の①管理的な心理化と②自己実現の心理化の相補的な構造化作用およびその渦中における自己のあり方という主題とはやや位相が異なると考えられるため、本論では深く言及しないこととする。

（2）樫村、斎藤、山田らは「心理学化」、片桐は「心理化」、森は「心理主義化」という表現を主に使用しているものの、大きくは同様の現象を指し示していると考えられるため、本論では基本的に心理学化に文言を統一するとともに、文脈に応じて互換的に各々の表現を使用している。

（3）新しい個人主義は自己のあり方に関する主義、ハイパー・メリトクラシーは主に労働領域における能力に関する主義であるため、厳密には異なる概念である。しかしエリオットは、新しい個人主義の浸透とともに、とりわけ労働領域では、仕事内容や人間関係において機敏性・柔軟性に関する能力が重視されるようになってきていることや、それに伴って自己やアイデンティティが流動化していくことを指摘しており（Elliott 2010=2010: 63-5）、また、後述のとおりハイパー・メリトクラシーは、自己の流動性や多元性も包含する概念と考えられるため、双方の視点の親和性は高いと言える。

（4）森は現代社会について、「人格崇拝」と「合理化」が規範として位置づけられており、人々は、カウンセラーや心理療法家、精神科医などが発信する心理学的な知見を用いて自分の感情をコントロールし、そのような規範に適合的な主体＝「どのような場でも他者と円滑にコミュニケートでき、合理的にふるまえる主体」の構成が要請されるという議論を展開している（森　二〇〇〇：七二―九〇）。この視座を参照すると、心理学化の進展は、労働領域において先鋭的に見られながらも、現代社会全体を覆う社会意識として捉えられる。

（5）この傾向を示す一例として、日本アンガーマネジメント協会が主催するアンガーマネジメントの受講者数は、二〇一二年度が八，五四九名に対して二〇一九年度は三一七，九八一名と、飛躍的に増加している（日本アンガーマネジメント協会　二〇二〇）。

（6）本田自身もまた、対人能力、意欲、思考力、創造性などの獲得が目指される人間力を、ハイパー・メリトクラシー型の能力として捉えている（本田　二〇〇五：六一―三）。

（7）ただし樫村は、ギデンズやU. ベックらの個人化に係るアプローチに対して、「グローバル社会やリスク社会への移行に伴い社会の様々な審級が衰退し、「個人化」が進み個人の負担が大きくなることは考慮していても、楽観的に近代主体を考えているので、そこに伴う心理的危機は考察されることはない」（樫村　二〇〇三：二三七）と批判的に見ている。

（8）津田も類似の議論を展開しているが（津田　二〇一九a）、本節は、片桐、牧野、樫村らの視座を参照しその議論を発展させることで、自己の不確定性の縮減に加えて（絶え間ない再帰的問い直しに基づく）多元化への志向性も理論的に内包した点に新規性がある。

（9）脳科学・生物学的な知による統治や自己構成は、N. ローズも積極的に議論を展開しており（Rose 2006=2014）、国内では斎藤などによって早くから指摘されている（斎藤　二〇〇九）。樫村はこのような潮流を「ポスト心理学化」と呼称し、心理学化と緩やかに区別しているが、わが国ではもともと心理学的な知の普及と同時的に進行した現象と考えられるため（樫村・片桐　二〇一一：三七九―八〇）、本論では便宜上、心理学化ととりたてて区分していない。

（10）場（field）概念について、本論ではブルデューの議論を参照し、「共通の価値を持った行為者の集合によって構成される、相対的に周囲から自律した社会空間」といった意味合いで使用している（Bourdieu 1979=1990：石井　一九九〇：vi）。

（11）ハビトゥスは持続的な性向を有すると同時に、変容可能性にも開かれているという指摘もあるが（安田　一九九二：三〇七―八）、本論では前者に基づいた構造の変わりにくさに着目している。

（12）ただし、厳密な意味でこのような短期的・流動的な自己のあり方を「物語」と呼べるかどうかは、別途検討する必要があると思われる。

（13）本論で示している自閉症の特徴は、これまで自閉症、広汎性発達障害、アスペルガー症候群など様々な名称で呼称されていた一連の症状群を抽象化し、概観的に捉えたものである。これらの症状群は、二〇一三年のアメリカ精神医学会の診断基準DSM―5の発表以降、「自閉スペクトラム症」としてまとめて表現されるようになった（厚生労働省　二〇二〇）。本論ではこれに習い、便宜上、この自閉スペクトラム症に当たる一連の症状群を、自閉症と呼称している。

（14）このような排除に関して、価値観の多元化や人間関係の流動化の進展によって、揺るぎのない自己の自明性が解体することによる不安を指摘した土井の研究（土井　二〇一三）や、社会構造の流動化の進展によって、今までの自己と今・これからの自己の一貫性が解離にさらされることで、アイデンティティ不安が顕在化することを指摘した津田の研究（津田　二〇一七）などが、同様の問題意識に基づいた議論を展開している。

（15）本論は、こういった排除がとりわけ今日において（一般的な行為者も共感しうるレベルで）構造的に生じていることを主張するものである。他方、とりわけ自閉症やコミュ障と言われる／それらに共感を覚える人々の心的困難を微細に見ていくに当たっては、当然ながら、より多角的な分析が必要と思われる。

（16）本論では趣旨が異なるため深く言及はしていないが、これらに関する規範は、科学、政治、国際関係等の諸システムが複雑化・高度化した今日の社会において、「人間らしさ（あるいは自己・アイデンティティ・主体など）が脱構築されていく過程」を論じる、「ポストヒューマン」の視座（Braidotti 2013=2019: 11, 28, 41）とも関連していると考えられる。

文献

浅野智彦，二〇〇一，『自己への物語論的接近―家族療法から社会学へ』勁草書房．

浅野智彦，二〇一五，『若者とは誰か―アイデンティティの30年（増

補新版）』河出書房新社.
東浩紀，二〇〇一，『動物化するポストモダン―オタクから見た日本社会』講談社.
Beck, Ulrich, 1986, *Risikogesellschaft: Auf dem Weg in eine andere Moderne*, Frankfurt am Main Suhrkamp.（＝一九九八，伊藤美登里訳『危険社会―新しい近代への道』法政大学出版局.）
Bourdieu, Pierre, 1979, *La Distinction:Critique Sociale du Jugement*, Éditions de Minuit.（＝一九九〇，石井洋二郎訳『ディスタンクシオンⅠ』藤原書店.）
Bourdieu, Pierre.1980, *Le Sens pratique* Éditions de Minuit.（＝一九八八，今村仁司・港道隆訳『実践感覚』みすず書房.）
Braidotti, Rossi.2013, *The Posthuman*, Polity Press Ltd.（門林岳史監訳，二〇一九，『ポストヒューマン―新しい人文学に向けて』フィルムアート社.）
千葉雅也，二〇一三，『動きすぎてはいけない―ジル・ドゥルーズと生成変化の哲学』河出書房新社.
土井隆義，二〇一三，「フラット化する社会の陥穽―カリスマ待望論をめぐって」『社会学ジャーナル』三八：二七―三九.
Elliott, Anthony.2010, "The New Individualism after The Great Global Crash（＝二〇一〇，片桐雅隆訳，「グローバルな大暴落以降の新しい個人主義」『現代社会学理論研究』四：五四―六六.）
――――，片桐雅隆・澤井敦，二〇一〇，「新しい個人主義と現代日本」『現代社会学理論研究』四：六七―九二.
Giddens, Anthony.1991, *Modernity and Self-Identity: Self and Society in the Late Modern Age*, Stanford University Press.（＝二〇〇五，秋吉美都・安藤太郎・筒井淳也訳『モダニティと自己アイデンティティ』ハーベスト社.）
本田由紀，二〇〇五，『多元化する「能力」と日本社会―ハイパー・メリトクラシー化のなかで　日本の〈現代〉』ＮＴＴ出版.
堀田裕子，二〇一二，「解題―クロスリーの身体論」Crossley, Nick. 2001, *The Social Body:Habit, Identity and Desire*, SAGE Publications.（＝二〇一二，堀田裕子・西原和久訳『社会的身体―ハビトゥス・アイデンティティ・欲望』新泉社，二九七―三一一.）
石井洋二郎，一九九〇，「本書を読む前に―訳者まえがき」Bourdieu, Pierre, 1979, *La Distinction: Critique Sociale du Jugement*, Éditions de Minuit（＝一九九〇，石井洋二郎訳『ディスタンクシオンⅠ』藤原書店，v―vii.）
岩脇千裕，二〇〇四，「高度成長期以後の大学新卒者採用における望ましい人材像の変容」日本社会学会第七七回学会発表配布資料.
樫村愛子，二〇〇三，『「心理学化する社会」の臨床社会学』世織書房.
――――・片桐雅隆，二〇一一，「「心理学化」社会における社会と心理学／精神分析」『社会学評論』六一（四）：三六六―八五.
――――，二〇一九，『この社会で働くのはなぜ苦しいのか―現代の労働をめぐる社会学』作品社.
片桐雅隆，二〇一七，『不安定な自己の社会学』ミネルヴァ書房.
厚生労働省，二〇二〇，『ASD（自閉スペクトラム症，アスペルガー症候群）について』（二〇二〇年九月一日取得，https://www.e-healthnet.mhlw.go.jp/information/heart/k-03-005.html）.
牧野智和，二〇一二，『自己啓発の時代―「自己」の文化社会学的探究』勁草書房.
――――，二〇一四，「「人間力」の語られ方―雑誌特集記事を素材にして」『日本労働研究雑誌』五六（九）：四四―五三.

森真一，二〇〇〇，『自己コントロールの檻』講談社．
日本アンガーマネジメント協会，二〇二〇，『はじめての方へ』（二〇二〇年一二月三一日取得，https://www.angermanagement.co.jp/about）．
Ritzer, George, 1993, *The McDonaldization of Society*: An Investigation into the Changing Character of Contemporary Social Life, Pine Forge Press,（＝正岡寛司訳，二〇〇八，『マクドナルド化した社会―果てしなき合理化のゆくえ』早稲田大学出版部．）
Rose, Nikolas,1999, *Governing the Soul*: The Shaping of the Private Self (second edition), Free association Books（＝二〇一六，堀内進之介・神代健彦監訳　『魂を統治する―私的な自己の形成』以文社．）
――――, 2006, The Politics of Life Itself: Biomedicine, Power, and Subjectivity in the Twenty-first Century Princeton University Press.（＝二〇一四，檜垣立哉監訳，小倉拓也・佐古仁志・山崎吾郎訳『生そのものの政治学―二十一世紀の生物医学、権力、主体性』法政大学出版局．）
斎藤環，二〇〇九，『心理学化する社会」―癒したいのは「トラウマ」か「脳」か』河出書房新社．
津田翔太郎，二〇一七，「過剰流動化の進展によるアイデンティティ構成の困難に関する理論的考察」，『社会学雑誌』三四：九四―一一二．
――――，二〇一九a，「アイデンティティ理論の拡張―統合論／多元論の区分を越えて」，『現代社会学理論研究』一三：七〇―八二．
――――，二〇一九b，「アイデンティティ理論の再構築」，二〇一九年度博士課程後期課程学位論文．
山田陽子，二〇〇二，「心理学的知識の普及と「心」の聖化」『社会学評論』五三（三）：三八〇―九五．
安田尚，一九九二，「P．ブルデューによるハビトゥス概念」『上越教育大学研究紀要』一一（二）：三〇一―一六．

（二〇二一年一月一〇日投稿受理、二〇二一年五月一七日掲載決定）